

PIPERS

2017
MAY
850yen(+税)

パーチャョ・フローレス

「歌うトランペット」に聞く音色のつくり方

ホルン大野総一郎

ドイツのオーケストラ生活36年

フルート神田勇哉

東京フィル首席

音楽ワークショップの
あり方を考える

マイケル・スペンサー

ウィーンの響きを
持つ Xeno!

インタビュー：神代 修

ハイレゾしてますか？

トーンマイスターに聞いたハイレゾオーディオの世界

パイパーズのホームページ：www.pipers.co.jp

Oboeジョン・マック

連載◎我が遍歴を語る

429





スเปนサー氏が客員教授を務める上野学園のフアンシテーター養成講座から。(写真提供：上野学園大学)

くひらく世界を音楽で

「音楽はすばらしいもの、楽しいもの」という一方的な押し売りに終始しがちな従来の音楽ワークショップを変えるべく、日本フィルなどと共同して新しい教育プログラムを実践する。

聞き手・文 鉢村優 (音楽評論)
Sophie-yuu HACHIMURA

上野学園大学客員教授
日本フィルハーモニー交響楽団コミュニケーション・ディレクター

マイケル・スペンサー
Michael Spencer

世界的な音楽団体に教育ディレクターを歴任し、子供向けにとどまらず企業向けのワークショップなど独自の活動を展開するマイケル・スペンサー氏。日本でも、日本フィルのアウトリーチプログラムや全国のワークショップ巡業、また上野学園大学での教育活動を通じて注目が集まっている。この分野のバイオニアである同氏に、具体的な手法と音楽ワークショップに対する哲学を訊く。

——まず、この仕事を始めた理由を教えてください。ただですか？ ロンドン交響楽団(LSO)のヴァイオリニストとして活動し続けることもできたと思うのですが。
MS もっと広い世界へ成長したいと思ったからです。マラー、ブラームス、ハイドン、モーツァルト……同じようなレパートリーを弾く毎日が、なんだかとても有限に感じられました。誰かに言われたことをやるのではなく、自分の仕事に自分で責任を持ちたいと思ったのです。
外的な要因としては、30年前にイギリスのアーツ・カウンシル(芸術文化を支援する機関)の方針が変わったことです。投資に対するリターンを、教育の分野

コンサートホールから学校へ単に場所を変えるだけでは、教育プログラムは成立しない。

で特に強く期待されるようになりました。でも当時の教育プログラムは面白くありませんでした。コンサートホールから学校へ単に場所を変えるだけでは、教育プログラムは成立しません。リサーチや準備が不十分だったので。
はじめて劇場の参加型プログラムに取り組んだときに、とても面白いと感じました。自分自身で意思決定ができるようになったんです。この分野を実験しながら開拓していきたくと思った。それでLSOを辞め、教育の分野に進んだのです。
——演奏家の世界から、より大きな可能性のあるフィールドに出て行っただけですね。
MS ええ。教育に関する膨大な本を読み、ビジネススクールにも通いました。この仕事を通じて沢山の異分野の人と出会い、刺激を受けています。ある時、聴覚障害のある子どもたちのためのワークショップをしたのですが、この経験はとくに示唆に富んでいましたね。彼らとは一緒にサンバを作りました。とても実験的で、即興的でしたよ。

ヘレン・ケラーはこう言っています。視覚障害は物体から人を遠ざけ、聴覚障害は人々から遠ざけると。聴覚の困難は、とくに人を孤立させるものなんです。耳

の聞こえない彼らが音楽をどう感じ取っていたかは、誰にも分かりません。でも、彼らがわたしたちのワークショップを通じて社会的性を高めていっていることがはっきりと分かりました。
ちなみにLSOには耳の聞こえないヴィオラ奏者もいるのですよ。普通にオーケストラを受けて、合格して、弾いている。彼女がどう聴き取っているかは分からないけれど、きっちり仕事をしています。こうしたことはとても示唆に富んでいると思うのです。音楽ってなんだろう、と。

ストラヴィンスキーの創造を体験する！
——ワークショップの具体的な手順を教えてください。

MS まず、参加者みんなを円になり、手で思い思いのリズムを叩いてもらいます。その際、他の人と違うリズムになるように促します。打楽器を渡したり、ジェスチャーで音量の大小を示唆したりして響きの変化を付けていきます。しばらく変化を楽しんだ後、徐々に小さくしてい

てアイスブレイク(簡単なゲームなどで集まった人の緊張をほぐすこと)は終了です。
続いて、絵を見せます(左図)。その図がどんなリズムと音を意味しているかを尋ね、皆で息を合わせて実演してもらいます。いくつかの図を提示し、最後にはそれらを組み合わせた少し長めのパターンで実演してもらいます。



マイケル・スペンサー
Michael Spencer
撮影：鉢村優

元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者、元英国ロイヤルオペラハウス教育部長。世界各地で教育・地域・人材育成プログラムの開発・実践により高い評価を得る。映画『ピーターと狼』(2008年アカデミー賞 短編アニメ部門受賞)の教育ディレクター。日本でも約20年前からプロオーケストラや各地のホール、自治体と教育普及プログラムを実施。現在、上野学園大学客員教授、日本フィルハーモニー交響楽団コミュニケーション・ディレクター。

続いて絵の束を渡して、好きな順番に並べて自分たちのパフォーマンズを作ってください、とお願ひします。絵はすべて使い切ることに、おぞましく攻撃的な雰囲気にしてほしいというリクエストつきで。そしてグループごとに発表してもらいます。最後に種明かし……このワークはストラヴィンスキー《春の祭典》のリズムを抽出したものでした。オーケストラの演奏を聴いてみます。作品が扱っている題材や、ストラヴィンスキーがインスピレーションを受けた土地の風習について説明していきます。

MS こうしたプログラムはどのように作成するのですか？
MS まずは作品の背景を徹底的に調べ

ます。作曲年や作曲者というような基礎的な情報から始めて、作品で扱われている事柄について膨大な資料を集め、整理します。《春の祭典》でいえば、素材となった民謡や、その地域の風習。また、民族宗教の儀式がどんなものだったか。踊りはどんなステップか、どんな衣裳を着て行われたのか、等々。視覚的な資料もたくさん集めます。

そして作品そのものを丁寧に観察していきます。楽譜を読み、必要に応じて自筆譜を見て、その作品のコア、本質となるものを探すのです。《春の祭典》の自筆譜には、ストラヴィンスキー自身がリズムの扱い方を検討した形跡があります。4、3、5、4、うーん、と彼は試行錯誤

最後に種明かし……
「このワークは《春の祭典》のリズムを抽出したものでした」と

しています。

ワークショップのなかで、絵を自由に並べ替えて、ただし全部を使ってパフォーマンズを作ってもらいましたが、それはこうしたストラヴィンスキーの創造の追体験なのです。創造性を養うプロセスでもあるし、数学的な組み合わせの訓練でもあります。作品の本質的な部分を捉えて、そこから広げるようにワークショップを組み立てていきます。

音楽には様々な要素がありますが（いわゆるリズム、メロディ、ハーモニー）、わたしは特にリズムに注目してワークショップを組み立てています。原初の古代から人間はリズムの本能を持っていきます。4足歩行をやめ、手が空いて、人間はジェスチャーを発展させました。手を打つこともそのはじめにあつたでしょう。

MS 楽譜にもとづいている、というのがマイケさんのワークショップの大きな特徴だと思います。他にはどんな楽曲の例がありますか？
MS 英国免疫学協会と実施した大人向けのワークショップでは、ベートーヴェンの交響曲第5番を扱いま

しいぞ、ありがたく聴きなさい！とね。なぜベートーヴェンが素晴らしいのか、音楽が面白いのかについて考えたり語ったりする人はほとんどいません。ワークショップでのコミュニケーションをを通じて、こうしたことを共に考えていくことができます。

MS 定期演奏会のプログラムを扱うプレトークのようなケースや、アークヒルズ音楽ウィークのようなイベントの機会に行うケースが多いですね。
学校向けのワークショップも多いですが、特に杉並区立天沼小学校とのプロジェクトは素晴らしい事例です。回数を重ねるとのことととても大切なことです。多くのワークショップは一期一会で、その後の様子を見てフォローアップすることはできませんが、継続することでより深い理解と楽しみへ進んでいくことができます。しかしそれを実現するには並大抵ではないエネルギーが必要です。学校の非常にタイトなカリキュラムの中で、交渉によって時間と予算を獲得していかなければいけません。保護者の方々の間にも、はじめは懐疑的な見方があるものです。音楽なんかやったら何になるんだ、とね。そんな時間があったら学科の授業をしてほしい。そうおっしゃるのも無理もありません。

MS 内容はほとんど違いません。もちろん、環境が違うということがあります。子どもたちは何もいわずに信頼して委ねてくれますが、大人たちにはまず「なぜやるか」「なぜ必要か」を説明する必要があります。大人向けでも、子供向けでも、大事なことは「協働する」「目に見えない価値を認識する」ことです。我々アーティストは、いつも目に見えない価値を作り出そうとしています。音楽はとくに、有形のアートと違って触ることができません。一瞬で消えてしまうのですから「お前はだれなのか、何をしよう、どんな価値を生み出しているのか？」という周回から厳しく問われ、自問自答を繰り返しています。

音楽は異文化を端的に学べる素材

子ども向け教育プログラムだけでなく、社会人や会社を対象としたワークショップも多く手がけていらつしやいます。両者の間に違いはありますか？
MS 内容はほとんど違いません。もちろん、環境が違うということがあります。子どもたちは何もいわずに信頼して委ねてくれますが、大人たちにはまず「なぜやるか」「なぜ必要か」を説明する必要があります。大人向けでも、子供向けでも、大事なことは「協働する」「目に見えない価値を認識する」ことです。我々アーティストは、いつも目に見えない価値を作り出そうとしています。音楽はとくに、有形のアートと違って触ることができません。一瞬で消えてしまうのですから「お前はだれなのか、何をしよう、どんな価値を生み出しているのか？」という周回から厳しく問われ、自問自答を繰り返しています。

「納豆」のシンパ

マイケさんのワークショップでは、参加者同士のグループワークが多いのも印象的です。これにはどのような意図があるのですか？
MS 音楽は本来、人間のコミュニケーションを教えるものだからです。従来型の鑑賞教室では、押し黙って《運命》や《新世界》を聞かされて、眠くなっ

せん。クラシックになじみのない方も多いです。音楽ワークショップが持つ意義や価値を説明し、説得しなければ実現しえないのです。このプロジェクトの実施にあたって、天沼小学校の藤山先生にはとても感謝しています。長年続けてこられて、最近では丸一日かけてワークショップができる機会さえ作ってくださいました。この取り組みを続けた結果、保護者の方々から驚きの反応が返ってきました。「子どもがこんなに、クラシックのことを生き生きと話している！ なんだか面白そう！」と。こうして学校、保護者も一緒になって取り組む環境が生まれたのです。

子ども向け教育プログラムだけでなく、社会人や会社を対象としたワークショップも多く手がけていらつしやいます。両者の間に違いはありますか？
MS 内容はほとんど違いません。もちろん、環境が違うということがあります。子どもたちは何もいわずに信頼して委ねてくれますが、大人たちにはまず「なぜやるか」「なぜ必要か」を説明する必要があります。大人向けでも、子供向けでも、大事なことは「協働する」「目に見えない価値を認識する」ことです。我々アーティストは、いつも目に見えない価値を作り出そうとしています。音楽はとくに、有形のアートと違って触ることができません。一瞬で消えてしまうのですから「お前はだれなのか、何をしよう、どんな価値を生み出しているのか？」という周回から厳しく問われ、自問自答を繰り返しています。



サントリーホールが主催する「アークヒルズ音楽週間」で(写真は2015年の時のもの)、日本フィルのメンバーと体験型コンサートを行うスペンサー氏。(写真提供：サントリーホール)

学校向けのワークショップでは杉並区立天沼小学校とのプロジェクトは素晴らしい事例。

……受け手はつまらないと思って離れていってしまう。ここで音楽は、トップダウンで与えられるものになっています。一方通行なんですね。
関西で開かれたシンポジウムに参加したときに、前文化庁長官・近藤誠一さんが面白い表現をされていました。「皆さん納豆は好きですか？」と尋ねたのです。好きな人は半分くらい。彼は続けます。「納

豆が嫌いな皆さん、納豆は栄養があつて、安くて、環境にも優しく素晴らしい食べ物です。食べればいいじゃないですか。どうして食べないんですか？」と。
もちろんこれは一つのジョーク。納豆が嫌いな人は食べたくない。自然なことです。でも私たちは、音楽や芸術になると、こんな押し売りをしてしまいがちではないでしょうか。ベートーヴェンは素晴らしい

音楽で世界をひらく
学校向けのワークショップでは杉並区立天沼小学校とのプロジェクトは素晴らしい事例。

ワークショップではモンゴル、北インド、スペインのロマ、ISのリクルートソングまで登場。

的産業ですね。目に見えない価値を生み出していることは、音楽と同じといえるのではないのでしょうか。金融やコンサルタント業のような業種だけでなく、製造業に属していても、リアルなモノを作るという工程に関わっている人は少ないわけですね。無形の価値に対するリテラシーを深めることは、自分と他者の仕事を尊重する姿勢につながります。

私はスタッフエンゲージメントのために、多国籍企業の依頼でワークショップを行うこともあります。それは、各国の文化や発想を音楽で端的に共有することができるからです。取ってシンプルに見れば、西洋は論理的で、東洋は和の文化といえますが、ソナタ形式は西洋の文化そのものです。第1主題と、性格の違う第2主題は議論して格闘し、最後にはお互いの意見を踏まえて合意を導きだします。こうした論理性は法的な仕組みにも共通するものです。自分が属する社会の文化はふだん意識しませんし、異文化を理解しようと思っても、問いが漠然とすぎて難しい。音楽を素材とすれば、自分と相手の文化を端的に学ぶことができます。

——ワークショップではモンゴル、北インド、スペインのロマ、コンゴのパカ族の歌、そしてISのリクルートソングまで登場しましたね。多様な文化へのまなざしと、現代的なアクチュアリティーを感じました。

なりサーチと準備をし、構成もしっかり頭に入れて臨みますが、現場ではすっかり忘れていきます。これが大事です。事前の計画や段取りにとらわれていては、いい成果は得られません。目の前の人と出来事に即興的に応じ、答えていく。そのためには、よい問いを投げかけることが大切です。

——「意思決定」という言葉が何回か登場しました。マイクさんのワークショップに対する考え方のキーワードだと思いますが、この言葉についてもう少し説明していただけますか？

MS 現代は、自分で考えることが軽んじられていると思います。誰かがこう言ったら、自分はそれに従っただけだ、悪いのはあいつだ……、こうした責任の転嫁が繰り返されています。

一方、「わたしはこういう根拠に基づいてこう考えたから、こう行動する」というプロセスを経ると、その結果を誰かのせいにして逃げることができます。自分で考えるから結果に責任をもつことができるのです。それが人として実体がある、実存 (substantial) ということではありませんか？

だからわたしは一方通行で知識を押し着せることをしません。質問を通じて、進むべき道を示唆するだけです。答えは提供しません。その意味で、ギリシャ哲学の問答 (対話) のスタイルに則っていますね。ワークショップをするときには「目の前の足場を登っていくと、気がついたら高みに到達していた」と感じてもらえるように心がけています。よい問いという足場を、自らの力で登っていくこと。音楽という素材を相手に、自分の力で考える癖を付ける。こうした意思決定の力、人としての実存を養ってほしいと

MS ロマの子どもたちやアフリカの人々とワークショップをすると特に、音楽が文化的アイデンティティを表現し、共同体を維持するために機能しているというのに気付きます。音楽を通じて「わたし/あなたが何者であるか」が引き出されるような気がするのです。

いま、私たちの暮らしは非常に多文化になっていきます。例えば、わたしの国イギリスは現在「フィッシュ&チップス、乗馬、英国教会、アフタヌーン・ティー」とロイヤルファミリー」の国ではありま



せん。ロンドンには多くのイスラームの人々が住み、ユダヤ教のシナゴグがあり、スーパーマーケットに行けば世界中のエスニックな食材が並んでいます。

ワークショップの効果を高める3つのポイント

——ワークショップはしばしば、その日限りの祝祭になりがちです。翌日には普通の生活に戻って、忘れていきます。ワークショップの影響を持続的なものに



東京都杉並区立天沼小学校でのワークショップの様子。(写真提供：日本フィルハーモニー交響楽団)

音楽教室は楽しくなくてはいけない、と誰が決めたのでしょうか？

MS 私自身、マイクさんのワークショップに参加した際、ワークショップの類では感じたことのない不安感を覚えました。課題はとて難しく感じましたし、訊かれたことのないような問いかけが多かったため、混乱しながら頭をフル回転させました。正直、終わったときにはヘトヘトでした。

MS それは良かった(笑)。ワークショップがよく機能したということですから。ワークショップは、ただ楽しいだけで

するにはどうしたらよいのでしょうか？ MS それには3つのポイントがあるでしょう。まず、好奇心を持たせること。自ら進む意欲を引き出すのです。興味を持ってもらうこと。好奇心を引き出すために、ほくらファシリテーターは環境づくりに心血を注ぎます。安心で、友愛があつて、楽しい雰囲気作りを。そんな環境が、学びの潜在能力を引き出すのです。

次に、意思決定を経験させること。ワークショップでは、参加者の心理的な緊張と弛緩を巧みにコントロールします。緊張させて、笑ってほめて、また引き締めて。完全に快適な状態ではなく、ちょっとしたアンバランスな状態に参加者を置くことによって、動的な環境ができ、自ら試行錯誤する姿勢を引き出すことができます。

そして柔軟な関係性を築くこと。入念

混乱や不快感、居心地のわるさ、猜疑心も大切な要素です。 蝶は、さなぎから出て翅を伸ばすとき非常に痛い思いをしているそうです。でもそうしないと翅の先まで血がいきわたるようにならず、飛べるようになりません。苦闘が必要なのです。画家にとっても、描きは始める前の「パニックタイム」が必要という人がいます。何も手に付かない錯乱状態が続いて、それが堰を切つて出るとき、やっとカンバスに絵を描けるんだと。

今、わたしがこれまでに手がけてきたワークショップの事例や考え方をまとめた本を準備しています。英語からの翻訳ではなく、完全に日本のための書下ろしです。今年中の刊行を目指して頑張っています。楽しみにしていてください。 ■